

1850年代の F・ダグラス

清 水 忠 重

Summary

F. Douglass in the 1850s

SHIMIZU Tadashige

The 1850s was the decade that the colonization movement was suddenly accelerated by the enactment of Fugitive Slave Law. This law made the condition of northern black people unstable and insecure. Henry Clay, the embodiment of colonization movement, began to set out the arguments for the American Colonization Society in the U. S. Senate and presented petitions that urged Congress to establish a line of government steamers to transport emigrants to West Africa free of charge.

Douglass started to express his opinions against colonization in this tight situation. Referring to the Irish stock and the Indians, he contended that the black people were American born citizens and the rightful owners of the American soil. Before the Irish people came here, we had watered the soil with our tears and enriched it with our blood. We had fought and bled for our country. The Indians, the original owners of the soil, had gradually retreated from the Atlantic coast before the onward march of the white man until they had disappeared from the face of this country. But, not so with the black people, who had prospered under the great disadvantages. The white and the black had to fall or flourish together.

Douglass contends that for the universal acknowledgment of the equality of races, the black people must show their practical equality, or equal attainments with the white. He admits, on the other hand, that the black people cannot exhibit their natural gifts on account of the hard discriminatory surroundings of America. He does not seem to have presented the effective means to solve this knotty problem.

はじめに

フレデリック・ダグラスは一貫してアメリカ植民協会の運動に批判を加え、アメリカ国内での黒人の地位改善をとなえた人物として知られている。かれの植民協会批判がもっとも活発におこなわれたのは逃亡奴隷法の制定（1850年）前後の時期に集中している。逃亡奴隷法は南部奴隷制の強化に手を貸すと同時に、北部における自由黒人を排除しようとする動きを加速するものでもあった。この法律の制定以後、奴隷主の意を受けた役人たちが公然と北部を横行するようになり、逃亡奴隷の逮捕を妨害したり、逃亡者に宿を提供したりした者には、罰金と禁固刑が課せられることになった。またこの法律では、逃亡容疑者の証言は証拠として認められないことになっていたため、自由黒人は白人の申し立てさえあれば、奴隷の身分に転落する可能性が生じてきたわけで、この法律は自由黒人を浮き足立つような状況に置くことになったといえる。これを機に自由黒人の間で移住（黒人たちの自発的な国外脱出）の動きが高まっていったのは当然であったし、また白人の側からも自由黒人を積極的に追い出そうとする動きが出てきた。この時代はまた黒人追い出しの動きとは逆に、ヨーロッパから多数のアイランド人が押し寄せつつあった時期であったし、黒人人口の増大とは裏腹にインディアンが滅亡へと追い込まれつつあった時期でもあった。こうした状況の中でダグラスがどのような論拠を挙げて、黒人植民に反対し、黒人擁護論を展開していったかを以下たどってみたい。

（1）逃亡奴隷法

1850年に成立した逃亡奴隷法についてダグラスがどのように述べているか一瞥しておこう。ダグラスは1851年1月26日、すなわち逃亡奴隷法が成立した4ヶ月後に、ニューヨーク州ロチェスターでおこなった「信仰による迫害、皮膚の色による迫害」と題する講演のなかで、アイランド問題を引き合いに出した上で、逃亡奴隷法を次のように論じている。宗教のちがいによる迫害、アイランド人に対する迫害と差別は、皮膚の色のちがい以上の迫害と差別を引き起こしている。専制と抑圧は、人種のちがい以外の要素でも起こるようである。カトリック教徒は公職に就くことができない。土地を購入することもできなければ、31年以上借りることもできない。カトリックとプロテスタントの結婚は禁止されており、これに立ち会った牧師は死刑に処せられる¹⁾。イギリスは100年以上にもわたってアイランド人にこうした差別的な措置を講じてきたわけであるが、アメリカでもこれとおなじ過酷な措置がいま講じられようとしている。こう述べた上で、ダグラスはアメリカの逃亡奴隷法へとはなしを切り替える。抑圧は1時間ごとに増大しており、ここ数ヶ月間の出来事は、奴隷制の崩壊を望む者、自由の勝利を望む者にとっては、決定的に重要な意味を持っている。一連の打撃が、われわれの無防備な頭上に下されようとしている。われわれは敵国に住んでいるも同然である。星条旗を見上げても、誰も保護を与えてくれはしない。ただたんに逃亡奴隷ではないかという疑いをかけられただけで逮捕され、投獄される事件が各地であいつぐにいたっている²⁾。

こうした趨勢の中でダグラスがもっとも重要な動きであるとして注視したのは、アメリカ植民協会に再び活を入れて、これを活性化しようとする動きが合衆国の各地で起こっていることであった。そして、これを具体的に示す事例として、ダグラスはアラバマ州の奴隷主たちがアメリカとアフリカ西海岸を結ぶ蒸気船の建造を要請する請願書を連邦議会に提出したことを挙げている。この請願書には、蒸気船の建造がアフリカ奴隷貿易の鎮圧、郵便物の輸送、商業の拡大に資することが謳われていた。この請願書に言及してダグラスは、「植民の死んだ骨に新しい生命が注ぎ込まれようとしている」と述べて、危機感を募らせている³⁾。

この講演から1年半のちの1852年7月5日、ダグラスはロチェスター女性奴隷制反対協会の招きに応じておこなった「7月4日は奴隷にとっては何なのか？」と題する講演のなかでも、逃亡奴隷法につぎのように言及している。この広い共和国の国土は、いまや人間の狩り場となっている。泥棒や強盗や社会の敵ではなく、何の罪もない人間の狩り場になっている。黒人にとっては、この国には法律も正義も人道もない。裁判官は哀れな犠牲者を奴隷制にひとり引き渡すごとに10ドルの金を手にするのであり、2人のならず者の宣誓があれば、黒人を無慈悲な奴隷制に突き落とすことができるのだ。裁判官は抑圧者の側にしか耳を貸そうとしていない。キリスト教の教会も、逃亡奴隷法を宗教的な自由に対する宣戦布告だとはみなしていない。教会は宗教というものを慈悲、正義、愛の原理としてではなく、たんに形ばかりの礼拝や儀式としてしか考えていない。宗教家たちは正義をおこなうことよりも賛美歌を歌うことのほうを重視している。教会は奴隷制の防波堤になりさがっている⁴⁾。このように述べた上でさらにダグラスは対外関係を引き合いに出して、つぎのように聴衆に語りかける。あなたがたはロシアやオーストリアの専制君主を非難し、アメリカの民主制を自慢するが、しかし国政レベルで言えばあなたがた自身、バージニアやカロライナの道具ないしはボディーガードになりさがっているのではないか。あなたがたは海外からやってくる圧政の逃亡者を歓迎して迎え入れ、保護し、かれらのために湯水のように金を使うことを惜しまない。しかし、他方であなたがたは同じ国土の中の逃亡者を追い回して逮捕し、殺しているのではないか。あなたがたはフランスやアイルランドの自由を熱狂的に叫んでいるが、アメリカの奴隷たちの自由に関しては氷のように冷淡ではないか⁵⁾。

(2) ヘンリー・クレイと植民の動き

ダグラスは1850年の逃亡奴隷法に先だって、植民の動きが出てきたことにいち早く注目している。ちなみに1849年5月31日にボストンのファニユイル・ホールで「植民主義の復活」と題して講演をおこない、ヘンリー・クレイの植民プランを批判している。クレイはリチャード・ピンデルにあてた手紙の中で、ケンタッキー州の奴隷解放のありかたを論じている。それは1860年以後うまれた奴隷の子は25歳になったら解放し（すなわち1885年から奴隷の漸進的な解放をおこない）解放奴隷の植民を実施するという内容のものであった。クレイの手紙は植民協会の機関誌『アフリカン・レポジトリ』にも掲載されて広く出まわり、北部ウィッグ党員のあいだでも広く支持されたようだ。ダグラスはこのクレイの動きにいち早く植民復活の動き

をみてとったといえる⁶⁾。

逃亡奴隷法成立の4ヶ月前である1851年1月15日に、ヘンリー・クレイは連邦上院で植民を擁護する演説をおこなっている。この演説に関してもダグラスは「信仰ゆえの迫害、皮膚の色ゆえの迫害」(1851年1月26日)と「ヘンリー・クレイと植民の合唱、詭弁、欺瞞」(1851年2月2日)という二つの講演のなかで批判を加えている。以下この二つの講演をみておこう。

なぜクレイを取り上げるのかという理由を説明して、ダグラスはこう述べている。それはクレイの演説がアメリカ植民協会の思想の要約になっているからであり、クレイをあつかうということは植民の問題すべてをとりあつかうということであり、クレイに反駁するということは過去40年間流布されてきた植民路線の標語、詭弁、欺瞞に反駁することであるからだ、と⁷⁾。ダグラスはまたこうも言っている。クレイはその政治的経歴において、立場をいろいろと変えてきた。しかしこと自由黒人の除去という点に関しては、終始一貫した立場をとり続けてきた。老齢で墓に入る寸前であるにもかかわらず、この男の虚栄心と黒人に対する蔑みの念は青年期に劣らず旺盛である。もし死ぬ瞬間に、心のなかで一番おおくの部分占める感情が口をついて出てくるものだとなれば、クレイの震えるくちびるから漏れる最後の言葉は、おそらくこの男が全生涯をつうじてその雄弁を注いで否定してきた黒人に対する悪意と嫌悪に満ちた言葉なのであろう、と⁸⁾。ダグラスにしては非常に激しい書きぶりであり、ダグラス自身がクレイに対して大きな憎悪を抱いていたことをうかがわせる書きぶりになっている。

ダグラスはクレイの言葉を具体的に引用しながら、植民論者クレイのレトリックをつぎのように紹介していく。人道にもとる奴隷貿易を効果的に抑圧するには合衆国の自由黒人を移住させ、アフリカ西海岸に植民地を建設すること以外にない。その意味で、自由黒人のアフリカ植民は重要である。しかし、植民の意義はそれだけにとどまらない。他の観点から言っても、植民は重要である。わたしは、諸君に言いたい。今日のあらゆるプロジェクトのなかで、自由黒人をその合意をえた上で、アフリカの岸辺に送り返すというプロジェクトに匹敵するような、偉大な企てがほかにあるであろうか。自由黒人は首都では、この10年間で二倍に増えている。数多くの州は、自由黒人を州外に排除するために厳しい法律を制定しつつある。正義と人道の名において、自由黒人をいったいどのようにあつかったらいいのであろうか。わたしは、かれらの祖先が連れてこられた場所に、かれらを送り返す方法以上にいい方法を思い浮かべることはできない。しかも、自由黒人のアフリカ送還によって恩恵をこうむらないようなひとはいないと思う⁹⁾。北部の白人も、南部の白人や奴隷も、そして自由黒人自身も恩恵をこうむるであろう。なぜなら、自由黒人は白人と同じ社会的政治的地位へと上昇することのできない国にとどまるのではなく、父祖の地に帰るのであり、ここにはけっして到達することのできないような重要な地位につくことができるからである。自由黒人を、かれらの合意を取り付けた上で合衆国からアフリカへと輸送することによって、あらゆる利益が促進され、商業、文明、宗教がうながされることになるであろう。しかも、かれら運び出すことによって、いったい誰が被害をこうむるというのであろうか¹⁰⁾。もし南部人の望むように南部の問題を処理させ、ひとびとがお互いに罵りあって連邦を危機にさらすのをやめ、すべてのひとびとが植民というこ

の偉大な目的のもとに馳せ参じて、自由黒人を本当の自由を享受することのできる場所へと送り返すことに全エネルギーを注ぎ込むならば、この国にとってなんと輝かしい結果がもたらされるでありましょう¹¹⁾。

クレイは黒人植民をこの時代のあらゆる事業の中で、他に匹敵するもののない重要な企てと考えているかのようで、この演説は植民主義者の見解のみごとな要約になっている。ダグラスはこのクレイの演説を批判するに先立って、つぎのようにいっている。植民主義者のなかには黒人のことを誰よりも本気で考えていると自称するひとびとがたくさんいる。かれらは黒人を害しようとするどころか、黒人にとってもっともためになることをしようとしているのだという。しかし、ひとと論戦するとき、いちばん難しいのは、公然と敵対的な態度をとる敵よりも、真の動機を隠し、天使の姿を装い、無垢の衣装をまとうて近づいてくる偽装した敵を相手にするときである、と¹²⁾。

ダグラスがクレイの演説の中でとりわけ問題にするのは、「かれらの合意を得て」自由黒人を移住させるという箇所に出てくる「合意」という言葉である。アメリカ植民協会は自由黒人の合意を取り付けることを謳っており、クレイも演説のなかで黒人の合意を取り付けることをしばしば強調した。合意という言葉が添えられることによって、植民に正義と人道と自由黒人に対する思いやりの香りが添えられ、植民の提案はそのぶんだけより口当たりのいいものになっている。しかし現実問題として、合意がはたして尊重されるであろうか。実際には強制へと変質していくのではないか。ダグラスはこのように言い、プロドナクスというバージニアの植民主義者が州議会でおこなった発言をつぎのように引いて注意を促す。「強制力を行使しないなどと言うのは、怠慢である。ひとはすべてなんらかのかたちの強制力を考慮すべきである。もし自由黒人が行きたいというのであれば、行かせればいい。そうでない場合は、強制的に行かせなくてはならない。ひとびとの中には、必要とあらば直ちに強制力に訴えるべきであると唱えつつも、この点をいま現在法案にもりこむのは得策ではないと考えているひとびとがいる。かれらは1、2年もしたら、多くの者が出て行くことに合意するであろうから、その時残りの者を強制的に追い出したらいいいと考えている」¹³⁾。

クレイの演説の中で、もうひとつダグラスが注目するのは、蒸気船を建造せよというこの時期新しく出てきた提案である。1851年1月15日にクレイは連邦上院にロードアイランドの上流階級から託された請願書を提出しているが、この請願書は連邦議会が植民のために予算を組んで、西アフリカに無料で移住者を運ぶことのできるよう、連邦政府の蒸気船を建造せよという内容のものであった。この計画を推進しようとするひとびとは、合衆国とアフリカを結ぶこのような蒸気船が建造されるなら、たんに黒人の輸送だけでなく、平時の通商や郵便物の輸送、また海軍力の強化にも役立つであろうと主張していた。しかし、ダグラスはこの動きを看過することはできなかった。すでに逃亡奴隷の捕獲が合法化されてしまった以上、これに加えてさらに連邦政府が国庫を使って蒸気船を建造することにでもなれば、そして合意を標榜しつつも、そのじつ実際には強制的に自由黒人を追い出すような法案がつくられることにでもなれば、自由黒人を取り巻く状況はますます厳しくなるばかりである。ダグラスはクレイが推し進

めようとしている黒人排斥の潮流におおきな危惧の念を抱かざるをえなかった¹⁴⁾。

ダグラスはクレイの演説の基底にながれる偽善的なレトリックをつぎのように批判している。植民計画は黒人のためを思っているものであり、これが実施されるなら、アフリカにはキリスト教が広められ、奴隷貿易は廃止され、黒人は権利向上する土地に住むことができるというクレイの主張はまったくばかげた想定であり偽善でしかなく、たとえていえば奴隷貿易を非難する奴隷主、人間の権利向上を語る黒人ハンターのようなものである。黒人を奴隷化する際にしばしば持ち出された口実の一つは、この奴隷化と白人との接触が黒人の文明化に資するであろうというものであったが、クレイに代表される植民主義者が北部の宗教界に訴える際に持ち出すのも、これとおなじ論理、すなわちアメリカ黒人のもたらす文明と宗教が、あの不運な土地（アフリカ）に加えられてきた諸悪の償いをすることになるであろうというものである。クレイは一方でわれわれ黒人のことを腐敗、墮落した人間であるというが、もしそうなら、この腐敗、墮落した者を暗黒大陸に送り込むことによって、いったいどんな恩恵がアフリカの無知蒙昧な息子や娘たちにもたらされるというのであろうか¹⁵⁾。

（３）植民反対の理由

ダグラスは植民に反対する理由として、どのようなものを挙げているであろうか。かれの1850年前後の発言には、同じパターンの発言が繰り返されていることがわかる。以下、この点を具体的にみておこう。

1849年4月24日の「植民主義者のやり方」と題する講演で、ダグラスはアメリカ植民協会がイギリスに宗教家を送り込んでアメリカ黒人をおとしめる宣伝をしていることを批判している。そしてジョン・ブルについて一言述べておきたいとして、イギリスを旅行中、鉄道、馬車、ホテルなどで人種差別を感じさせられたことが一度もなかったことに触れ、アメリカとはなんたるちがいかと述べている。このあとダグラスは、海の向こうからこの国にやって来ているひとびとのなかで、ひとつだけわたしの注意を引くひとびとがいると前置きした上で、アイルランド人の名前を挙げ、数週間前に会ったあるアイルランド人は真顔で、黒人はこの国では決して上昇することはできないのだから、アフリカに行くべきであると言ったと述べている¹⁶⁾。これに対してダグラスは、アイルランド人は黒人も土地所有者になる権利があることを知るべきであるとして、ジェームズ・フォーテンの次の言葉を引いている。「われわれは、われわれの涙でもって、アメリカの土地を潤した。われわれは、われわれの血で、これを豊にした。…われわれはアメリカ生まれの市民である。われわれは、あなたがたが外国人を扱うのとおなじように扱ってほしいとお願いしているだけだ。……われわれはこの国のために戦った。……われわれはこの国を愛している者だ。」¹⁷⁾。これと関連して、ダグラスは独立革命時にバンカー・ヒルの戦いで戦死した黒人のことに言及し、アイルランド人は黒人が祖国のために血を流したあとからやって来ておきながら、黒人を祖国アフリカに送還せよなどと真顔で言っていると述べて、アイルランド人の言動を批判している¹⁸⁾。

ダグラスはボストンでおこなった「植民主義の復活」（1849年5月31日）のなかでも、植民

の動きを批判し、アイルランド人の言動を批判している。白人がアメリカに一番最初にやってきたとき、黒人もやって来たのである。ピルグリム・ファーザーズがこの州に上陸したのと同じ年に、奴隷たちがバージニアのジェームズ河畔に上陸した。それだけではない。われわれ黒人はこの国のために戦い血を流してきたのである。わが国の制度や歴史についてなにも知らず、この国のために汗水流したこともないアイルランド人はわれわれ黒人に対して祖国を出てアフリカに行き、そこで自由を享受せよなどと厚かましいことを言っている。しかし、わたしはこの国にとどまり、あなた方と一緒に暮らすつもりである¹⁹⁾。

ダグラスはヘンリー・クレイを批判した1851年2月2日の講演では、アイルランド人とインディアンに言及している。もしかりにわれわれ黒人が墮落し、放縦な人間であると仮定してみよう。しかし、墮落し、放縦な人間はほかにいないというのであろうか。そうではあるまい。毎年、何百、何千もの墮落したひとびと（すなわちアイルランド人）がアメリカの岸に上陸してきているのではないか。いったい誰がかれらの除去を主張しているであろうか。特定の人間を追い出そうという場合、墮落しているかいないかを判定するのはいったい誰なのか。アボット・ロレンスの工場で働く貧しい娘たちや、丘を削り、トンネルを掘るなどしている鉄道工事の労働者たちは、工場や鉄道会社の所有者たちと決して対等な暮らしをしているわけではない。にもかかわらず、なぜ追い出そうとする矛先を黒人だけに向けてくるのであろうか²⁰⁾。また白人たちの中には、われわれ黒人をインディアンと比べて、われわれもアメリカ社会から消え去っていくであろうと推測する者たちがいる。しかし、われわれはインディアンと同じ方向はたどらないであろう。このアメリカの国土は本来はインディアンのものであり、かれらは黒人よりも多くの利点を持っていた。だが、にもかかわらず、かれらは一步一步前進していく白人の前に退却していき、この国の表面から消え失せようとしている。インディアンは文明の進歩と傾きつつあるみずからの栄光を前にして、悲嘆に暮れて死んでいる。しかし、黒人はそうではない。われわれはからだつきや皮膚の色はヨーロッパ系と違っており、逆境と屈辱のうちに置かれているにもかかわらず、たくましく生きかつ栄えている。アメリカは子々孫々にいたるまで、永久にわれわれの母国である。われわれは400万に達しつつあり、これを国外植民するにはカリフォルニアの黄金すべてをもってしても不可能である。われわれを根絶しようと想像するなど、まったくもってばかげている。われわれは状況に適応し、同化していこうとしている。われわれを根絶してしまうことなどできはしない。白人と黒人は盛衰をともにするのみだ。われわれは死滅したり、追い払われたりすることはありえない。われわれはあなたがたとともに進み、あなたがたとともにとどまるのみである。もし白人に問うべきことがあるとすれば、それはわれわれ黒人を除去しようとするのではなく、われわれをよき市民、愛国者、クリスチャンにするにはどうしたらいいかを問うべきである²¹⁾。

ダグラスは1851年9月18日、ニューヨーク州バッファローでおこなった「自由黒人の居場所」はアメリカである」でも同様に、われわれはこれまであなたがた白人と一緒にだったし、現在もまた今後もずっとあなた方と一緒にいるつもりであると述べた上で、黒人が白人とおなじくらい早い時期にアメリカにやってきてこの国の発展に貢献してきたこと、インディアンやアイル

ランド人とはちがうのだということを強調裡に述べている。黒人奴隷はピルグリムの上陸と同時にこの大陸の岸辺に上陸したのであり、230年ものあいだ、われわれはこの大陸に足場を築いてきたのである。われわれはあなたがたと一緒に成長し、この国土をわれわれの涙で潤し、われわれの血で肥やし、われわれの手で耕してきたのである。なぜ、われわれがここにとどまってはいけないのであろうか。この国が荒野であった頃、われわれはやって来たのであり、われわれはこの大陸における文明のパイオニアであった。われわれがあなたがたの森林を切り開いたのであり、われわれの手があなたがたの畑から切り株を取り除いたのであり、われわれがあなたがたのテーブルに最初の実りを運んだのである。これまでわれわれはあなたがたと一緒にあったし、いまでもそうであり、今後も神の加護を得て、あなたがたとともに繁栄していくであろう。この国の学者の中には、われわれが死滅するであろうと推測しているひとびとがいる。ニューヨークのグラント教授は人類の進歩の過程で、われわれが(インディアンのように)完全に消滅してしまう人種であるかのように推定している。しかし、現実はそのようになっていない。いくらわれわれを鎖につなぎ、犬をけしかけ、不安に陥れようとも、われわれは依然として生きながらえている。われわれもアメリカ人である。われわれはあなたがたに、われわれをあなたがたが外国人(アイルランド人)を扱っているのと同じように扱ってほしいと要望しているにすぎない²²⁾。

以上見てきたダグラスの植民反対の理由を要約すると、つぎのようになろう。第一に、黒人は白人と同じくらい早い時期にアメリカにやってきて、血と汗でもってこの国を豊かにしたのであり、独立戦争においてもこの国を守って戦ったのであって、われわれはれっきとしたアメリカ市民である、というもの。第二は、われわれを差し置いて、あとからやって来た貢献度の少ないアイルランド人を優遇する雰囲気があるのは理不尽であろうというもの、またアイルランド人が黒人植民の主張に雷同するのを見るのは不愉快であるという主張。そして最後に、多くの白人たちはわれわれ黒人がインディアンのように死滅していくと予想しているが、現実には照らしてみても、そうはなってはいないというものである。

(4) 7月4日は奴隷にとって何なのか？

ダグラスは1852年7月5日におこなった「7月4日は奴隷にとって何なのか？」と題する講演の中でも、黒人はアメリカ市民であるということを前提に据えた上で、辛辣な奴隷制批判をおこなっている。ダグラスは独立記念日の偽善性をつぎのように衝いている。

独立宣言に盛り込まれた政治的自由と正義の原則は、われわれ黒人にははたして適用されているであろうか。わたしはこの輝かしい記念日の枠内には入れられていない。あなたがた白人の祝福は、黒人には共有されていない。父祖から受け継いだ正義、自由、繁栄、独立は、あなたがたの間では共有されているが、わたしには共有されていない。あなたがたに生命と癒しをもたらした陽光は、わたしには鞭と死をもたらしただけである。7月4日は、あなたがたのものであって、わたしのものではない。鎖につながれた人間を輝かしい自由の神殿の中に引っ張ってきて、喜びの賛美歌の輪に加われというのは、欺瞞とアイロニー以外のなにものでもな

い。あなたがたは今日ここでわたしに話をするよう求めることによって、わたしを笑いものにもしようというのであろうか。わたしはあなたがたの国を挙げての騒然たる喜びの声を聞く以上に、何百万もの黒人の悲しみの声を聞くのである。かれらを忘れ、かれらに加えられている不正を見過ごすことは、この上もなく破廉恥な裏切り行為になるであろう。わたしが関心を抱いているのは、アメリカの奴隷制である。わたしはこの日を奴隷の観点から眺めている。奴隷とおなじ立場に立ち、かれらの苦痛をわがものとして思うとき、わたしはこの国民の行為がこの7月4日以上に不正に思える日はないと思う²³⁾。

このあとダグラスは「奴隷が人間であることを、わたしは論証しなくてはならないというのでしょうか？それはすでに認められていることがらであります。誰もこれに疑いを差しはさむ者などいません」²⁴⁾と述べて、奴隷（黒人）も人間であるということを自明視した上で、つぎのように言葉を続ける。

あなたがたはわたしに、人間には自由を享受する権利があるということを論じなさいというのであろうか。わたしは奴隷制の悪について論じなくてはならないのであろうか。人間を獣のように扱い、ひとからその自由を奪い、賃金も与えずに働かせ、無知な状態に置き、棒で殴り、鞭で打ち、鉄のおもりをつけ、犬をけしかけて追跡し、競売にかけて売り、家族を引き裂き、歯が折れるほど殴打し、火傷を負わせ、飢えの恐怖をちらつかせて主人に服従させることが悪いことなのだと、わざわざわたしは論じなくてはならないのであろうか。わたしはそのようなことに労力や時間を割くつもりはない。では、ほかになにを議論したらいいのか。奴隷制は神が是認した制度ではないということであらうか。いや、そういう風に問題を建てること自体、神を冒瀆するものである。人道に反するものが、神の意にかなっているはずがないからであって、こういう議論はすでに過去のものである²⁵⁾。

このように、奴隷制の悪を論じた後で、ふたたびダグラスは独立記念日にはなしをもとし、その祝典の偽善性をつぎのように指摘する。

アメリカの奴隷にとって、7月4日は何なのであろうか。それは一年のうちで、他の日以上に不正と残虐さを感じさせる日である。奴隷にとっては、白人たちの祝福は見せかけのごまかしにすぎない。あなたがたの誇る国民的な偉大さは、空疎な虚栄にすぎない。あなたがたの喜びの声は空虚で心を欠いたものでしかない。専制に対するあなたがたの非難、自由・平等の叫びはうつろな欺瞞でしかない。あなたがたの祈りや感謝は、奴隷にとっては、たんなる言葉だけのものであり、偽善と欺瞞でしかない。罪を覆い隠すためのベールでしかない。この日の合衆国民以上に罪深いことをしている国民はほかにはないであらう²⁶⁾。

独立記念日におこなわれたこの講演は、講演の名手としてのダグラスの資質を十全のかたちで発揮したものとなっており、アメリカの自由と正義の偽善性をみごとに衝いたものになっている。しかしながら、この講演を当時の議論の土俵の上に置いて考えてみると、この講演はそれほど説得力があったとは思えない。少なくとも現在のわれわれが思うほど、当時の聴衆（白人の）に大きな感銘を与えるものではなかったはずであって、現在読み返して想像されるほど、当時のアメリカ白人を説得しうる議論にはなっていなかったと考えてよい。

その理由は、こうである。ダグラスはこの講演において、黒人がアメリカ市民であり、奴隷も人間であることを自明の前提としてしゃべっているが、当時の黒人奴隷制をめぐる議論、とくに奴隷制を擁護する側の議論は、けっしてこの点を自明視してはいなかった。むしろ逆にダグラスの反対陣営の論客たちは、黒人は十全の意味での人間ではない、白人とおなじ資質を備えた人間ではないという前提のもとで論陣を張っていたのであった。黒人は資質の上で白人よりも劣っているとするこの黒人の生物学的な劣等性の主張に正面から答えることなく、いわば当時議論の中心になっていた問題を素通りするかたちで、黒人と白人の権利の上での平等性を主張しても、それは説得的な議論にはならなかった。ダグラスの講演は、もう一步手前で取り上げておくべき根本的な問題を無視して自分の議論を勝手に進めているというかたちにしかなくなっていなかったというべきである。したがって、かれはこの2年後の講演で黒人は白人とおなじ意味での人間とみなしうるのかどうかという、ここで置き去りにした問題にあらためて正面から取り組むことになる。この点をつぎに見ておこう。

(5) 人種的に見た黒人の主張

ダグラスは1854年7月12日にオハイオ州のウェスタン・リザーブ・カレッジの卒業式で3000人もの聴衆をまえにして講演をおこなっている。黒人が大学のこうした催しに招かれてはなしをするのは異例のことであった。また講演の内容も、ダグラスが得意としてきた時事問題を追うといった形式のものではなく、人種の起源に関する学術的なテーマを扱ったものであった。

ダグラスは問題を切り出すにあたって、バージニア州の『リッチモンド・エンクワイアラー』紙の、つぎのような主張を取り上げている。白人の小作人は、意思と知性をそなえた自由な人間であって、かれには「自由と幸福の追求」という「不可譲の権利」がある。しかし、黒人にはこうした権利などないのであって、白人は黒人をかれの同意なしに永久に小作人として使うことができる。もし黒人も（白人と同じ意味での人間であり）自由と幸福の追求という権利をもっているのだとしたら、そのときにはわれわれ南部人は権利の篡奪をおこなっているという大きな誤りを犯しているのであり、黒人奴隷制を地上から消滅させなくてはならない²⁷⁾。

黒人は人間ではないということを前提にしたこういう議論を紹介した上で、ダグラスは黒人も白人とおなじ資質を備えた人間であることを示そうとして、人祖の問題に話を向ける。当時の学界では、人種の起源に関して、人祖単元論と人祖多元論という二つの説が提起されて、議論を呼んでいた。人祖単元論は諸人種の祖先はもとひとつであったが、環境などの外的要因の作用によって現在みられるような諸人種へと分岐していったとするもので、この立場のばあい、人祖がおなじという前提を据えているために、諸人種の同質性を主張する立場に傾きやすい。他方人祖多元論は、現在地球上にみられる諸人種はその初発から祖先を異にしていた、したがって諸人種の資質や身体特徴は最初から異質であったと主張するものである。19世紀半ばのアメリカでは、ダグラスも言及しているように、ノット、グリドン、アガシ、モートン等の学者が多元論を主張し、南部の奴隷制を擁護する論陣に荷担していた。なかでもダグラスは黒人に劣等者の刻印を押そうとする厚顔無恥な書として、ノットとグリドンの共著『人類の諸類

型』を挙げている²⁸⁾。

こうした人祖多元論の立場に対抗し、人祖単元論を論証するひとつの方法として、徹底した環境決定論の立場を打ち出すという方法があった。諸人種の人祖が同じであったということを論証するために、元来ひとつであった人間の身体が地表の諸地域に移住し分散していった際、環境の変化をこうむり、諸人種が派生するにいたったというわけである。ダグラスも人間の身体特徴は気候や生活習慣によって大きな変化をこうむること、とくに皮膚の色は気候に大きく関係していること、鍛冶屋は右腕が左腕よりも長く強くなることなどをあげて、この環境決定論を展開している²⁹⁾。ただしダグラスの論じ方は通り一遍な感じが否めなく、持ち出している事例もわずかなもので、納得のいく論証にはなっていない。

ダグラスはおなじこの講演のなかで、聖書をもちだして人祖単元論の正しさを別の論法を使って裏打ちしようとしている。すなわち、人祖単元論は誤解の余地がないほどはっきりしたかたちで聖書に説かれているのであって、もし万一この説が正しくないとするならば、聖書の真理性が危機にさらされてしまうではないかという論法である³⁰⁾。事実でもって論証すべきであるにもかかわらず、聖書の権威を持ち出し、それに寄りかかって単元論の正しさを論証しようとしているわけで、論証の仕方あるいは論証の手順というものがわかっていない、経験的な考え方に徹し切れていないというべきである。

人祖単元論の論証を企てた聖職者に、サミュエル・スタンホープ・スミスという人物がいる。かれは『人類の皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』（1787年）（以下、『試論』と略）をあらわして、科学者の主張する人祖多元論のテーゼに対して、聖書の説く人祖単元論の立場を擁護しようとした人物であるが、この著作においてスミスがとった方法は聖書に書いてあるから単元論は正しいといったようなものではなく、徹頭徹尾純経験的な事実に訴えて単元論の正しさを論証しようとするものであった。聖書の記述の真理性を論証し、聖書の権威を回復するために、聖書の記述を持ち出して論証するというのではまったくのトートロジーでしかないこと、聖書の権威を抜きにして、つまり聖書の記述など一切持ち出さず、事実を訴えて実証しなくてはならないことをスミスは自覚していた。ダグラスの手法は、この18世紀の聖職者と比べてみても、方法的に数段後退しているといわねばならない³¹⁾。

モートンに代表されるアメリカ人種学派の科学者たちの提示する人祖多元論のテーゼに科学的な論駁をくわえるという仕事は、じつは専門の科学者にとってもむずかしい仕事であって、ダグラスのような素人にできる仕事ではなかった。ダグラスは1883年4月16日におこなった後年の講演「われわれの運命はわれわれの手中にある」のなかで、「劣等性の想定も含めて、あらゆる不利な想定に取り囲まれた土地で生活しなければならないというのは、黒人にとって悲しい宿命である」³²⁾と述べている。黒人の劣等性という観念は一向に衰えることなく、むしろ19世紀末には以前にも増してアメリカ社会に充満していたわけである。

（6）黒人の優れた資質をどのようにして証明するか

黒人の優れた資質をどのようにして証明してみせるかは、ダグラスにとって大きな課題で

あった。1845年12月11日、アイルランドのベルファストでおこなった講演「黒人の劣等性に対する故なき非難」のなかで、かれは否定的に言及されている黒人の資質についてつぎのように述べている。

アメリカの奴隷主が奴隷制に反対する外国人に対してもちだす論拠は、黒人は劣等人種に属している、すなわち黒人は生来、知的にも道徳的にも劣っているので、自由を享受する能力など持っていないというものである。しかし、どんな国民といえども、奴隷が置かれているのと同じ環境に置かれたなら、黒人が示しているのと同じ知的道徳的能力の欠如を示すはずである³³⁾。わたしは現時点で黒人が白人とおなじ道徳的知的能力をもっていると主張するつもりはない。ただ黒人は抑圧され、向上する手段を奪われているがゆえに劣っているのだということを示したいだけである。アメリカ白人は黒人の道徳的感情や認識能力を鈍らせるような状況をつくりあげておきながら、なぜ黒人は白人のように道徳的で知的で宗教的ではないのであろうかなどと問うている。奴隷制の存続は、奴隷を無知な状態に置くことにかかっている。教育と奴隷制とは両立しない。アメリカの世論はすべて奴隷の教育に反対である。奴隷を墮落した状態に止めておくこと、これがアメリカ・デモクラシーと共和主義の政策である。国民の全エネルギーはこの一点に、すなわち奴隷の知性を破壊することに向けられているのだ、と³⁴⁾。

要するに、黒人の現時点での劣等性を認めつつも、この劣等性の原因を社会環境に帰しているわけであるが、このような劣悪な環境の中で、逆境のハンディを克服し、なおかつ黒人の優秀性を示すには、いったいどのような方法があるであろうか。ダグラスはこの問いに対して、それには黒人ほんらいの資質を発揮して、社会から認められるような卓越した業績を示し、また品行方正な振る舞いをするということであると言う。この点をかれはさまざまな講演のなかで繰り返し強調している。たとえば、1848年3月13日ニューヨーク州ロチェスターでおこなった講演では、つぎのように述べている。

北部の黒人は奴隷制問題に関して世論を変革することのできる力を持っている。黒人の振舞いは、味方からも敵からも観察されている。黒人は高い道德水準と自尊のこころを培わねばならない。社会の同情ではなく尊敬を博さなくてはならない。排他的組織を作ることをもってしては、それは不可能であって、ひとびとの中にとけ込み、全人民に関することがらに関心を示さなくてはならない。禁酒を実行しなくてはならない³⁵⁾。黒人の男女は最高の知性の高みをめざさなくてはならない。知は力なりということを知らねばならない。黒人は金を稼ぎ、出費を抑え、娯楽を切りつめ、社会に関して一家言もてるように、自分と子どもの教育に意をもちいねばならない³⁶⁾。

ダグラスは1854年4月14日オハイオ州シンシナティでおこなった「労働と自己向上」と題する講演でも同じような趣旨のことを次のように述べている。

わたしは黒人の境遇向上と人種平等がひろく認知されることを望んでいる。しかしいまのところ黒人とアングロ・サクソン人種との資質の平等を主張することができるよう十分な論拠はない。われわれは実際面での平等を、言い換えると業績の上での平等を示さなくてはならない³⁷⁾。もし黒人が白人との資質の平等を主張しようとするのなら、黒人は白人の発明・発見

に匹敵する業績を示さなくてはならない。すなわち、自力で鉄道や蒸気船が作れるようにならなければだめである。白人たちが鉄道を建設して、1時間に60マイルも旅行しているのに、われわれ黒人が徒歩でわずか4マイルしか歩けないというのでは、資質の平等を承認させることはできない。白人が蒸気船をつくるのに対して、われわれはコックや召使いとしてそれに乗るだけというのでは、白人がこの地球上の端と端で通信するというのに、われわれは1マイルの範囲内でしか話ができないというのでは、資質の平等を承認させることはできない。われわれは業績でもって自分を語り、尊敬を博さなくてはならない。建築家はかれが建てた建物で誇りを感じるものであり、かれの子供もその建物によって父を誇りとするのだ。黒人も後世に残るような永久のモニュメントをつくらなくてはならない。「黒人があの建物を造った」といわれるようなものをつくらなくてはならない³⁸⁾。

ダグラスは閉塞した頭打ちの状況の中で、なおかつ能力を示すことによって偏見を克服することを唱えているわけであるが、かれの論法は循環論の域を脱してはいないといわねばならない。偏見に取り囲まれているがゆえに、たとえ黒人が優れた資質を持っていたとしても、その資質は発揮できない。黒人は偏見の壁に阻まれて、持ち前の資質を発揮しようにも発揮できないような状況に置かれている。つまり偏見を克服しようと思えば、黒人が変わらなくてはならないわけであるが、しかし他方で黒人は偏見の壁に取り囲まれているわけであるから、変わろうにも変わりようがないという状況に置かれている。この循環論を断ち切る方法をダグラスは示していない。移住主義者のデレイニは国外に脱出し、偏見に煩わされない土地で黒人の資質を存分に発揮するという路線を唱えた。そしてこの移住主義の思想は、思想としてそれなりに筋が通っている。しかし移住を拒み、アメリカ国内での向上をとなえるダグラスの場合、脱出口のない循環論のなかで堂々めぐりをしているだけで、解決策は提示できていないといわねばならない。

おわりに

1850年代は、黒人植民の風潮が一挙に盛り上がった時代であった。逃亡奴隷法の成立は、黒人たちがいつなんどき奴隷状態につれもどされるかわからないという不安定な状況をつくりだした。アメリカ植民協会の大御所ともいべきヘンリー・クレイの弁舌は依然として健在であり、かれは連邦議会や個人的な書簡において、最後の情熱を振り絞るかのように黒人植民のために論陣を張り、植民機運のもりあげに尽力していた。こうした動きに対して、ダグラスは孤軍奮戦するかたちで、植民協会批判を展開している。ただかれの講演の本領は概してみずからの体験を語るその具体的、経験的な語り口のたくみさにあったというべきであって、抽象度の高いレベルの議論を体系的なかたちで展開していくというものではない。植民協会批判に関しても、ダグラスの批判はかつてのガリソンやジェイが示したような実証性や徹底性をそなえたものではなく、その論点はほとんどが言い尽くされたものにすぎない。ただ、かれが新しくつけ加えた点をいって挙げるとするならば、この時期大量に押し寄せつつあったアイルランド人と絶滅へと追いやられつつあったインディアンに関連づけて植民批判を展開している点であろ

う。とくに興味深いのは、アイルランド人に対するダグラスの態度に屈折したものが感じられることである。イギリスを訪問したこともあるダグラスはこの民族がアングロ・サクソン系によって長年、過酷な搾取と抑圧のもとに置かれてきた事実を知っていた。おなじ被差別者としての共感を、ダグラスはこの民族に対して覚えていたはずである。しかし他方でダグラスは、アメリカに渡ってきたばかりのアイルランド人が白人の側に身を置いて、黒人を差別し、黒人植民を肯定するのを許すことはできなかったはずである。1850年代のダグラスの発言にはこの屈折した心理が投影されている。

ダグラスが1852年7月5日におこなった「7月4日は奴隷にとって何なのか？」と題する講演は、アメリカの欺瞞性、偽善性を手厳しく批判したものとして、われわれの心を打つものがある。しかし、この講演は思想史の脈絡の中において読まれなくてはならない。この講演は、黒人は知的道徳的に白人とおなじ資質をそなえている、黒人もアメリカ市民であるということをも前提にすえて議論を展開しているが、当時論争の的となっていたのは、むしろこの前提そのものであって、事実、南部人は黒人と白人の異質性を前提にすえて奴隷制擁護論を展開していたのであった。数年後にダグラスは「人種的に見た黒人の主張」という講演において、このとき素通りしたこの前提自体の論証につとめているが、成功しているとは言い難い。またすぐ上にも述べたように、ダグラスは黒人資質の優秀性を示すために実際面で卓越した業績をあげるよう促しているが、他方でかれは根強い偏見の壁に阻まれて、黒人の知的道徳的資質が発揮できないことを嘆いている。トックヴィルは『アメリカの民主政治』のなかでアメリカの人種差別に言及して、黒人が変わるためには偏見がなくならなければならない、しかし偏見が存在する以上、黒人は変わりようがないと述べて、人種差別にまつわる悪循環を指摘したことがあったが、ダグラスの論じ方を見ていると、かれがこの悪循環を課題としてはっきり意識していたとは思われない。

注

- 1) John W. Blassingame, ed., *The Frederick Douglass Papers, Series One: Speeches, Debates, and Interviews Volume 2: 1847-54* (New Haven: Yale University Press, 1982) (以下、II と略), p. 292.
- 2) II, pp. 293-295, 298.
- 3) II, pp. 300-301.
- 4) II, pp. 375, 377.
- 5) II, pp. 382-383.
- 6) II, pp. 203-205.
- 7) II, p. 313.
- 8) II, pp. 312-313.
- 9) II, p. 305.
- 10) II, p. 305.
- 11) II, p. 306.
- 12) II, pp. 313-314.
- 13) II, p. 318.
- 14) II, pp. 303, 312, 318-319.

- 15) II, pp. 321-322.
- 16) II, pp. 161-165.
- 17) II, pp. 165-166.
- 18) II, p. 166.
- 19) II, pp. 210-211.
- 20) II, p. 323.
- 21) II, p. 325.
- 22) II, pp. 340-341.
- 23) II, pp. 367-368.
- 24) II, p. 369.
- 25) II, pp. 370-371.
- 26) II, p. 371.
- 27) II, p. 501.
- 28) II, pp. 503, 507, 519.
- 29) II, pp. 521-522.
- 30) II, p. 505.
- 31) ダグラスは「黒人の劣等性に対する故なき非難」のなかで、南部の奴隷主が奴隷制に反対する外国人に対してもちだす論拠は、黒人は劣等人種に属しているというもの、すなわち黒人は生来、知的にも道徳的にも劣っている、自由を享受する資格がないというものであると述べた上で、しかしどんな国民といえども、奴隷が置かれているのと同じ環境に置かれたなら、黒人が示しているのと同じ知的道徳的水準を示すはずであると述べて、現時点でみられる黒人の劣等性を環境に帰している。ところが、これに続けてかれは、たとえ合衆国の奴隷が他の国民に比べて、道徳的肉体的に劣っていることが証明されたとしても、そのことは黒人を奴隷にしてもいいという理由にはなりえない。聖書の言葉に照らし合わせるとき、ひとは弱者を足元に踏みにじり、残酷に抑圧するのではなく、弱者を支え手を貸すのが強者の義務であるところえるべきであると主張している。黒人の劣等性に関して大幅に譲歩した立場をとり、その譲歩したぶんを聖書でもってカバーするという方法をとっていることがわかる。John W. Blassingame, ed., *The Frederick Douglass Papers, Series One: Speeches, Debates, and Interviews Volume 1: 1841-46* (New Haven: Yale University Press, 1979) (以下、I と略), p. 98.
- 32) John W. Blassingame and John R. McKivigan, eds., *The Frederick Douglass Papers, Series One: Speeches, Debates, and Interviews Volume 5: 1881-95* (New Haven: Yale University Press, 1992), p. 63.
- 33) I, p. 98.
- 34) I, pp. 99-100.
- 35) II, p. 113.
- 36) II, p. 115.
- 37) II, p. 476.
- 38) II, pp. 476, 478.

(原稿受理 2004年9月30日)